

江津都市計画道路鰐谷線建設予定地内

た むろ
田室窯跡発掘調査報告書



1991年3月

島根県江津市教育委員会

江津都市計画道路鰐谷線建設予定地内

た むろ
田室窯跡発掘調査報告書

序

島根県西部いわゆる石見において誇れるものの中に江戸時代後期に始まるといわれる石州瓦と石見焼がある。江津市周辺は、これらの原料の都野津層があることから数多くの登窯が築かれてきたところである。

現在も江津市の重要な産業であるが、近代化により登窯は顧みられなくなり製品や不良品窯道具等が路傍に散在した状態となっている。

このような中で道路開設に伴い初めて登窯最盛期（昭和前期）の丸物窯跡の発掘調査を実施した。この成果を充分に生かし今後この分野の保存と活用について検討しつつあるところである。

最後に、この調査に係わっていただいた方々に深甚なる謝意と御礼を申し上げます。

平成3年2月 江津市教育委員会教育長 山藤通之

例　　言

1. 本書は、江津都市計画道路鰐谷線建設予定地内の田室窯跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、次のような体制で江津市教育委員会が実施した。

調査指導者 森脇 剛(江津市嘉久栄焼)、原 龍雄(江津市文化財研究会長)

三上 巍(江津市文化財審議会)、上田 勤(同)、宮本 巍(同)

山藤久男(同)、杉井和大(同)、島根県教育庁文化財管理指導係

事務局 山藤通之(教育長)、植田教治(社会教育課長)、藤井徳光(社会教育係長)、森田順子(社会教育係主事)、小林茂雄(同)、宮本徳昭(社会教育係嘱託員)

調査担当者 宮本徳昭(社会教育係嘱託員)

調査作業員 青木忠美、石田吾市、岩田哲春、佐々木勝美、佐々木ヒサエ、竹内 保、竹下伊作

調査協力者 田室 宏(土地所有者)、田室敏治(田室窯操業者)

3. 江津市都市計画課並びに江津市立郷田公民館の協力を得た。

4. 本書の執筆・編集・図面の作成並びに浄書と写真撮影は、宮本が担当した

5. 方位は、調査時の磁北を示す。

6. 遺物等は、江津市教育委員会社会教育課で保管している。

調査経過

平成2年6月江津市都市計画課から江津都市計画道路の変更協議が江津市教育委員会になされ、同年7月これを受けた分布調査結果をもとに双方検討し発掘調査を実施することとなった。同年同月市都市計画課は、文化財保護法の手続きを行った。市教育委員会は、市財政課との協議を経て同年9月に文化財保護法の手続きを行った。分布調査は、周知の遺跡の現地確認ということになった。

平成2年10月15日から同年11月8日まで現地調査を行い、以降報告書作成作業を行った。この間、同年10月30日に指導会を開催し遺跡の取扱いについて検討した結果、この窯が現状変更されることは止むを得ないという結論となつたが、石見焼の窯跡の保存並びに活用の条件が付された。

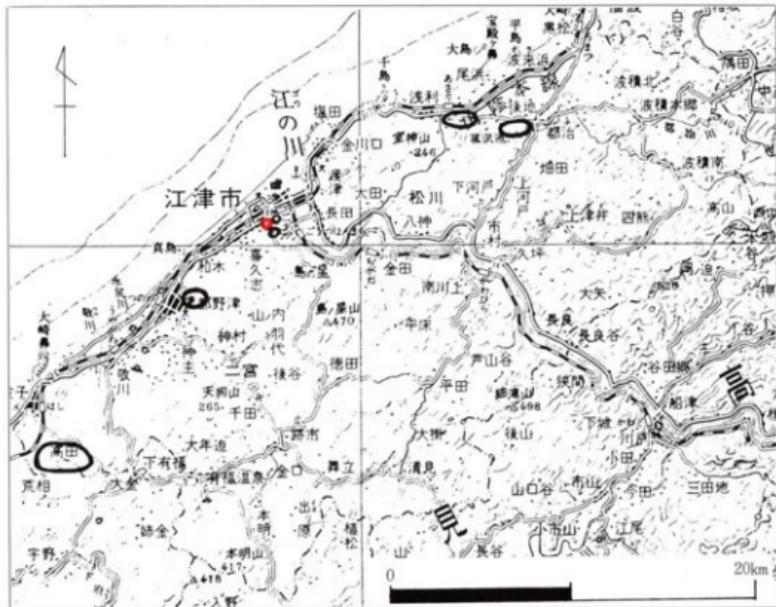
遺跡周辺の地理と歴史

江津市は、島根県の中央部やや西寄り「中国太郎」の異名をもつ江の川が、日本海に注ぐところに位置している。海岸線は、ほとんど砂浜となっている。山波は大きく2本あり、海岸線に平行している。水系は大きく3つに分かれ、山波の間を網目状に流れている。これにより小規模な耕作地が形成されている。

本遺跡は、江の川左岸市の中央部の江津町・嘉久志町境の北西に延びる丘陵先端部、標高20~30mの西斜面に築かれた丸物窯跡である。

市内には、新第三紀末（約100万年前）に石英閃緑岩（中世代）を基盤として海岸に不連続的に堆積した都野津層が分布している。この層は、石見焼の原土となる良質の粘土を挟んでいる。

市内には、約300の遺跡が台帳に登録され、その内の約200は石見焼の窯跡である。これは、約70の瓦窯跡と約130の丸物窯跡となる。石見焼窯跡の分布状況は、後地町藪地区・浅利町中心部・嘉久志町根本地区・江津町土床地区・都野津町東部・波子町南部の大きく6箇所に集中している（第1図）。本遺跡は、嘉久志町根本に所在する。この地区には、約30の窯があったことが確認されているが、現在確認できるのは数基である。石見焼の全盛期は、江戸時代末から昭和30年代頃までである。



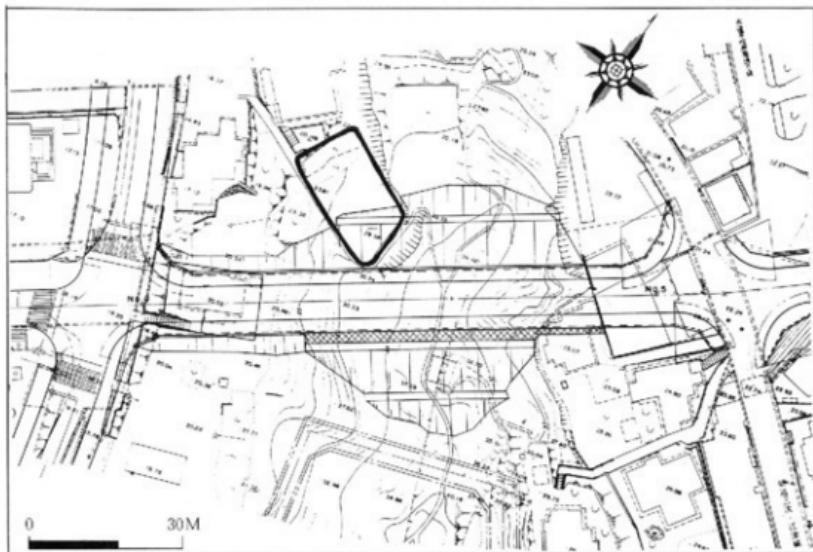
第1図 石見焼窯跡分布略図

調査結果

遺構 操業時の大正14（1924）年から昭和18（1943）年は、大口（焚場）・寄窯・2～13番・ふかせ（最終房—素焼き物焼成）・付属房（素焼き物焼成・乾燥）となっていたが、現在は大口から6番まで消滅している。今回の調査対象は、12番から付属房の全体と11番の小口（焚口）側半分、小口前作業場である（第2図）。

尾根筋から南斜面を切削し、窯用地を造成している。カマズヤ（窯を覆っている上屋）と甲は既になく、ツキスエは完全に近く残っていた。検出規模は、第1表のとおりである（第3図）。

ふかせは、大トンバリ（約42×42×15cmの壁材）を平らに敷き並べた上に耐火砂を約10cmの厚さに敷いていた。耐火砂とほぼ同じ高さ（厚さ）のハリ（焼台）を耐火砂中に置いてあった。



第2図 遺跡付近図

付属房は、ふかせの奥壁をトンバリ1枚に薄くしてふかせ同様の状態であった。大トンバリは、かなり軟質であった。

火格子は奥壁の両端にありこの間に幅15cm×高さ30cmの規模で小トンバリ1箇(32cm)毎に17あった。房間は一線となっていた。

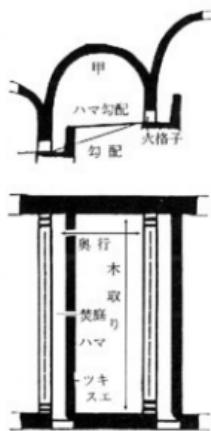
カマズヤの柱台を小口前作業場から検出した。12番から径約40cmの不整形円の偏平な石1、8番と11番から上端約25cm四方の高さ約30cmのコンクリート塊各1である。

小口前作業場は自然地形を段状に造成し、法面には窯道具や不良製品を一列積上げていた。

排水施設は、今回防災等の問題から検出できなかったが、側壁と山切削法面との間に幅約30cmのあまり深くないものがあった(田室敏宏氏より)。

遺物 13番の耐火砂上部から出土した甕口片と不良製品片・窯道具である。

窯道具は、ハリとゼーゲル錐(焼成温度を確認する素焼き物)・釉入れ碗である。ハリは、5種類ある。背の低い2種のうち大きいものは、載せる焼物の大小を表わす指痕があり、数や間隔で表示している。窯の中での配置に合わせ



第3図 丸物窯模式図(部分)

| 房 | 木取り | 奥 | 行 | ハマ | 勾配 | | 作業場 | 作業場 比高(対下段) |
|-----|-----|-----|-----|----|-----------|-----------|-------------|----------------|
| | | | | | 焚庭幅 | 勾配 | | |
| 11 | 6.0 | ? | ? | ? | ? | ? | 2.7 ×3.3 | ? |
| 12 | 6.2 | 2.8 | 0.4 | | % 19.2 | % 37.9 | 3.1 ×3.2 | 1.0 |
| 13 | 6.0 | 2.8 | 0.2 | | % 16.9 | % 37.9 | 2.9 ×2.8 | 0.9 |
| ふかせ | 5.7 | 1.8 | 0.3 | - | ? | | 2.1 ×2.0 | 0.7 |
| 付属 | 2.1 | 1.9 | - | - | - | | | |

第1表 遺構検出規模

て高さの調整やヌケ（ハリを高くし下部の平らなもの）と組合せている。

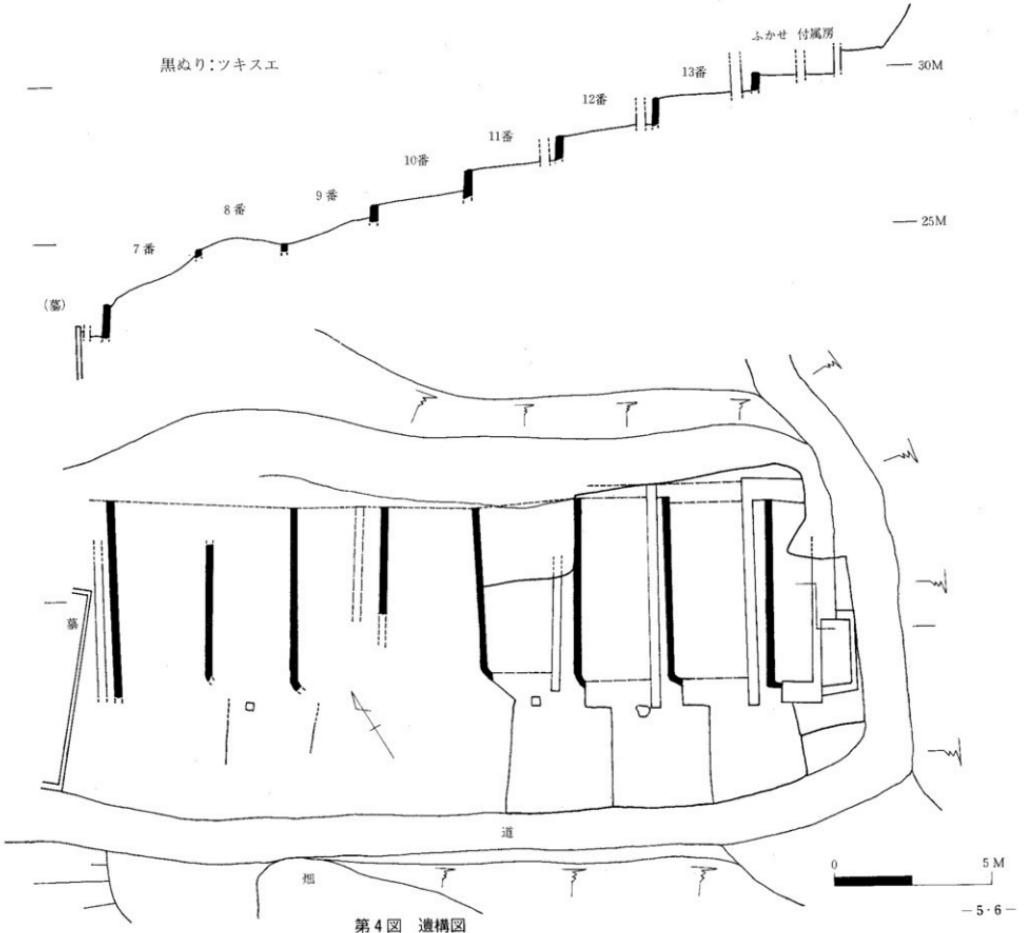
洋瓦が遺跡内にあり参考として収集した。裏面に「IWAMI」・「MARUSO」の陰刻がある。

ま　と　め

今回の調査は、窯全体のうち煙出し側部分だけであること等から即物的に全体を把握するところまではいかなかった。しかし、この窯の操業者の助言や江津市文化財研究会の業績から大概その形態等について把握することができた。

この窯は、築窯師島田一善氏により築かれ、付属房は田室氏により築かれたものである。大正中期以降の標準的な規模と形態を呈している。

この窯の操業に係る陶土・作業場・燃料・製品販売については以下のとおりである。陶土は、江津都市計画道路本町嘉久志線が江津バイパスと交差した北西角の山から馬で運搬していた。作業場は、都市計画道路本町嘉久志線とこの調査の発端となった同鰐谷線が交差する南東角にかけての平坦面にあった。燃料となる松割木は、だいそくと呼ばれ現江津市川平町や同桜江町川戸周辺から江ノ川を舟により下り、現国道9号線下江ノ川左岸の荷揚場に下し同じく馬や人により運搬していた。製品は、壺、蓋壺、捏鉢、紅鉢、片口、ホーロク等であり、現江津市波子町の専門の仲買人により舟で出荷していた。



江津周辺に多数の石見焼の窯があったが、第二次世界大戦の影響から昭和16(1941)年頃からの企業整備が行なわれ集約化されている。戦後は、需要により復興しつづけていたが、素材の変化により昭和30年代後半から急激に減少し現在では市内に10業者前後が操業している。

洋瓦は、昭和14(1939)年6月、現江津市都野津駅前に「日満洋瓦製作所」^註が設立されて製造されたものである。

註 「江津市誌」 1982年

参考文献 「石見渴」12号 江津市文化財研究会 1988年



調査前遠景 一西から一



調査後近景 一西から一



調査前近景 一西から一



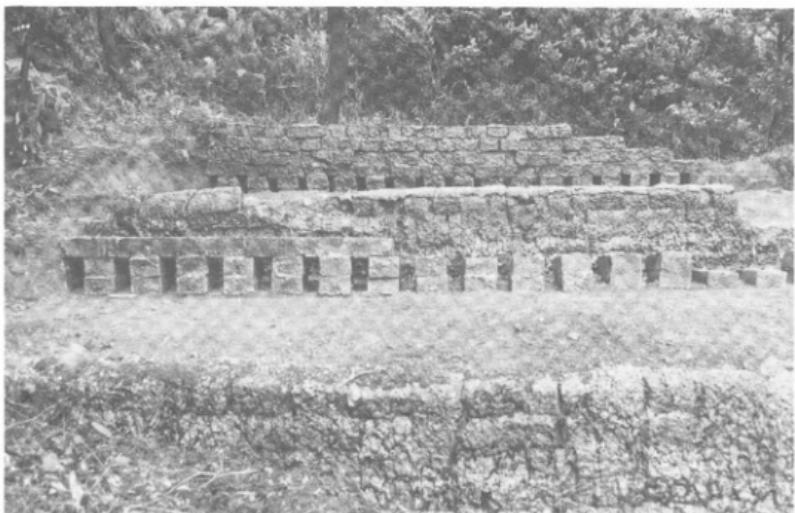
道路用地(左側平坦地は作業場跡)一南西から一



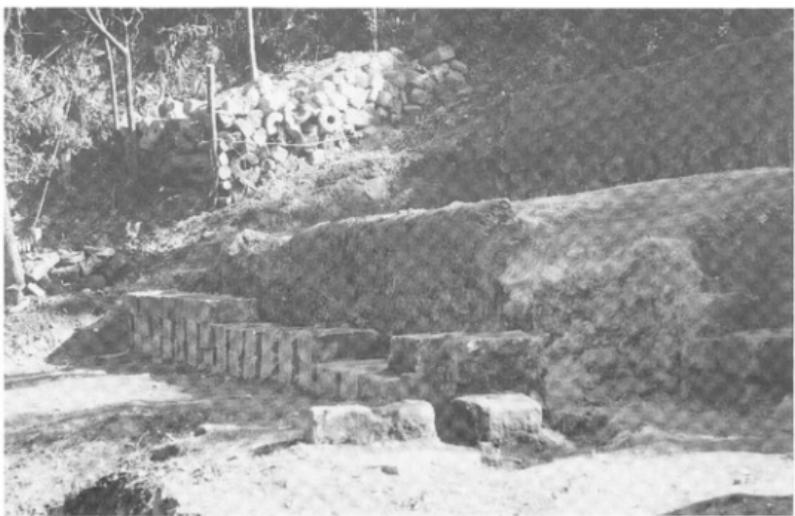
調査前近景 一大口側から一



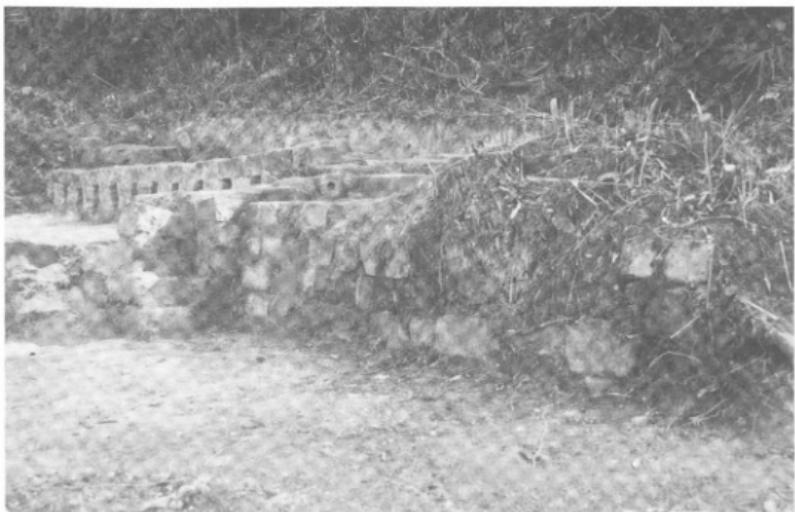
調査後近景 一大口側から一



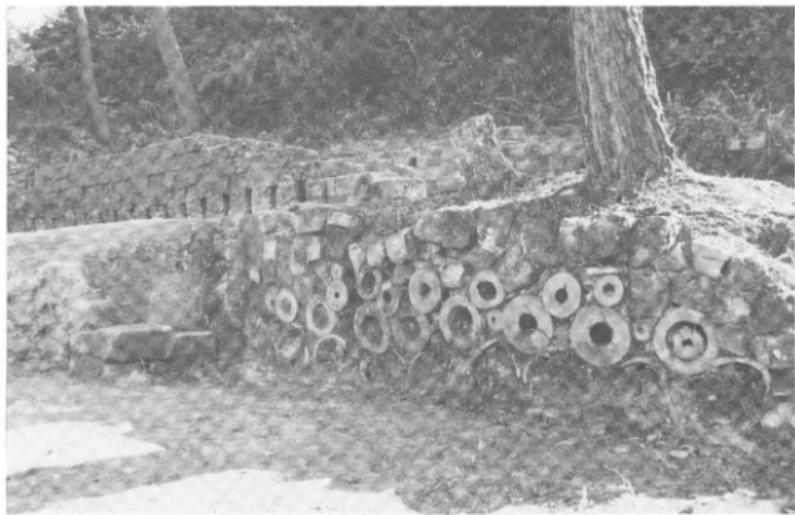
12・13番調査後 一大口側から一



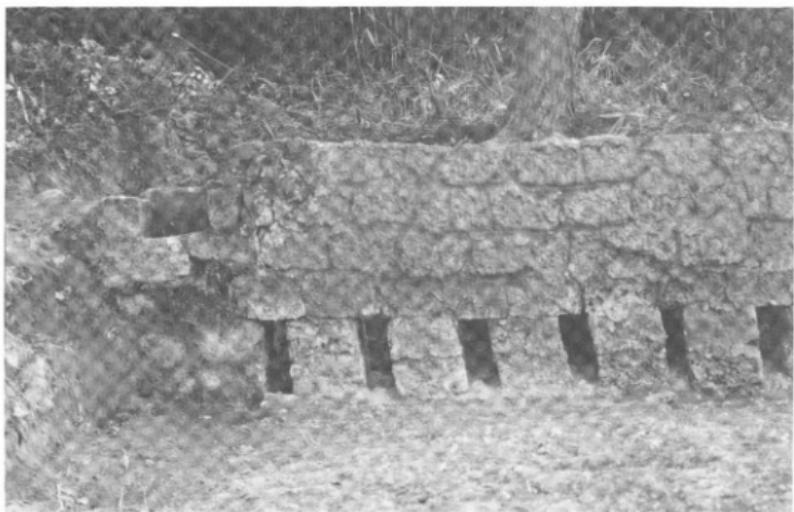
同上 -12番小口前作業場から一



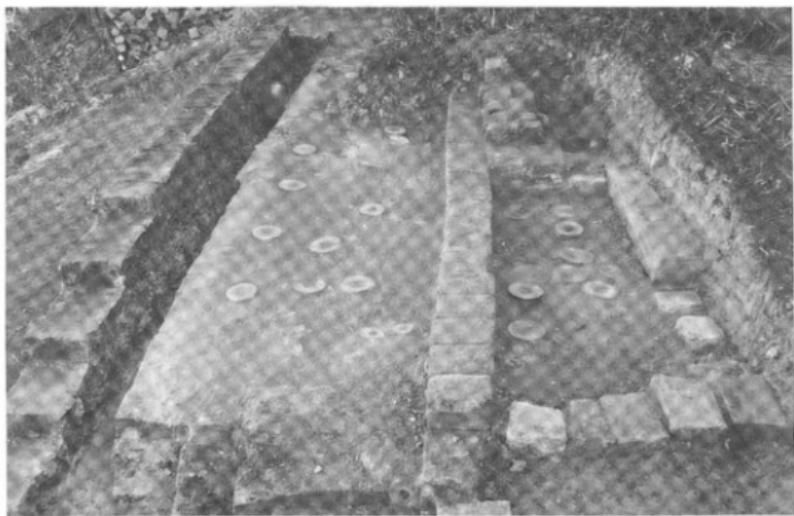
ふかせ作業場



13番作業場



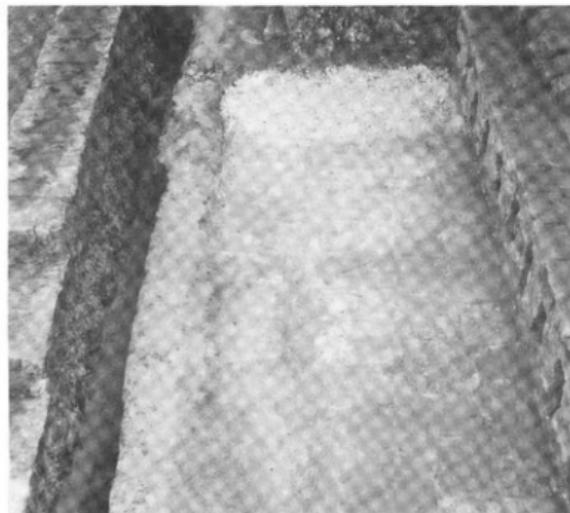
13番壁塗



ふかせ付属房使用状況 一小口側から一



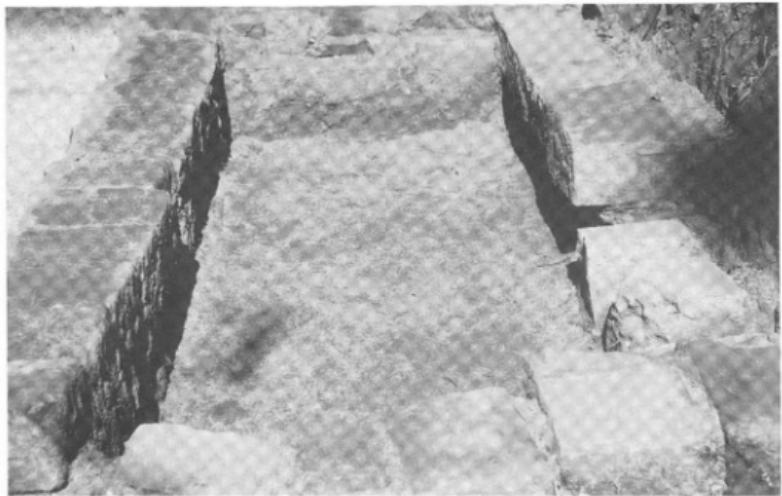
ふかせ ハリを除いた状態—小口側から—



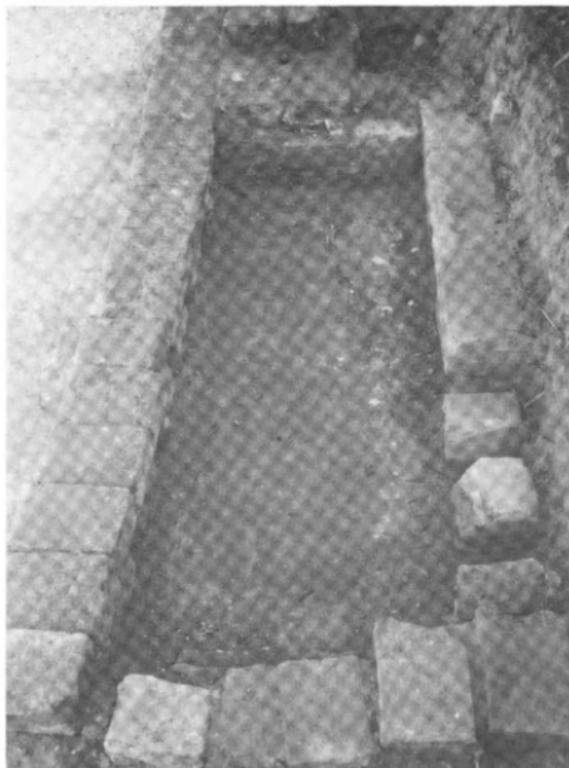
同 上

耐火砂を除いた状態

—同 上—



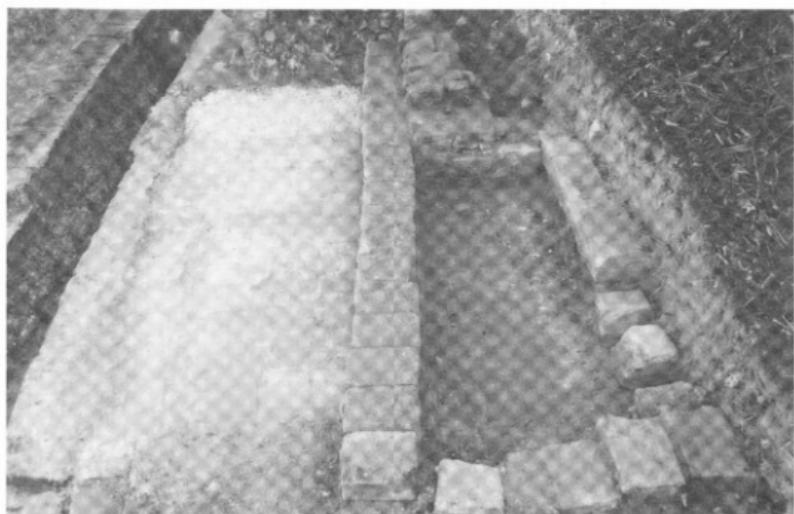
付属房 ハリを除いた状態 一小口側から一



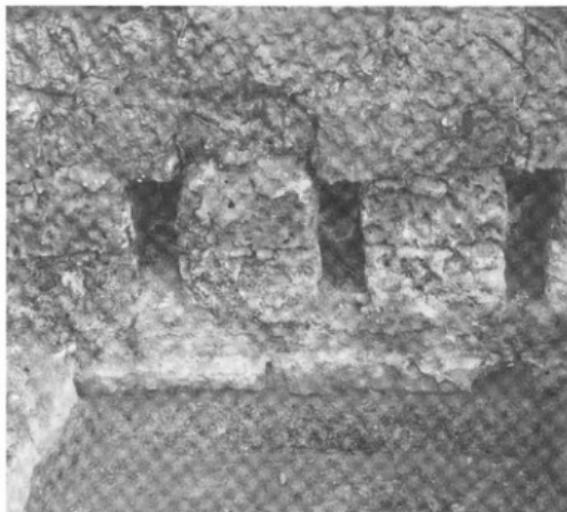
同 上

耐火砂を除いた状態

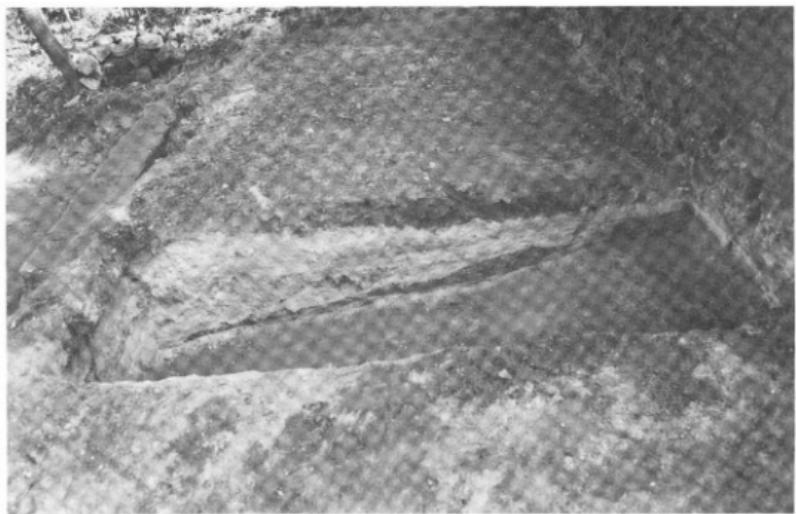
一同 上一



ふかせ・付属房耐火砂を除いた状態 一小口側から一



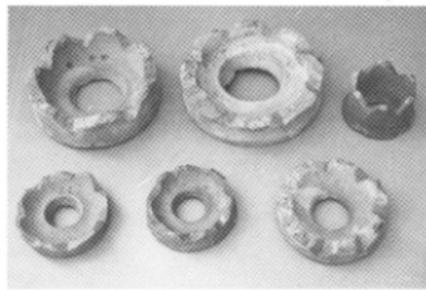
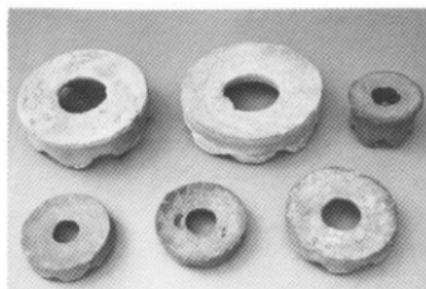
13番奥壁及び
下部構造
—焚庭側から一



13番ハマ下部構造断面 一小口側から一



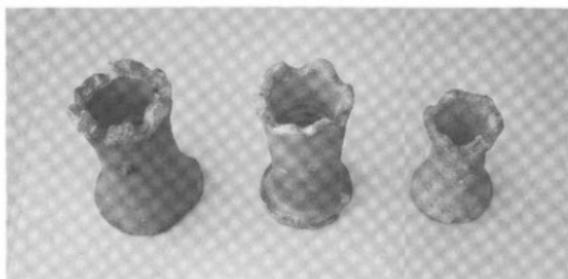
13番ツキスエ裏(ハマ)側 一奥壁側から一



ハリ①

ハリ②





失敗 一焼成状況—
上からハリ・壺・ハリ

ハリ ③

ハリ各種

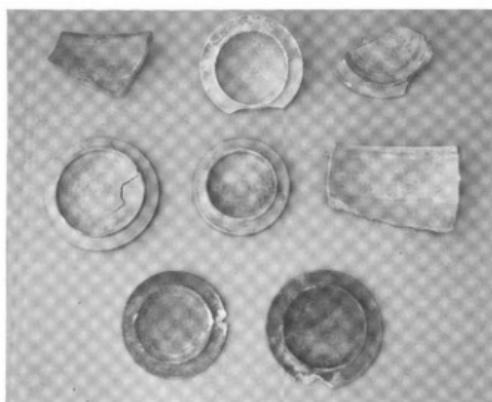




13番耐火砂
中出土

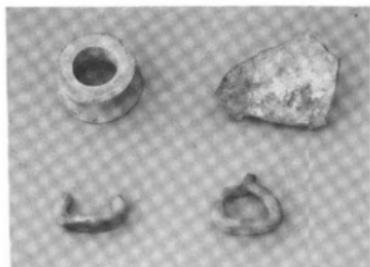
表 採

丸物各種



ハーリ

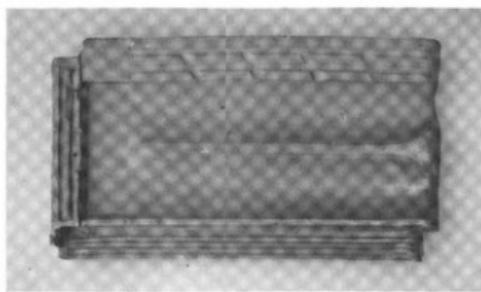
細入れ焼



ゼーゲル窯



ハリ「指先記号」



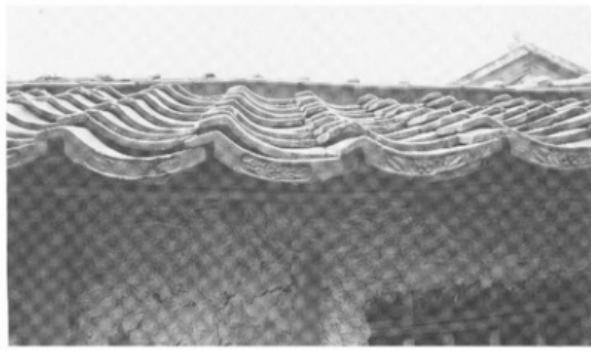
洋瓦（参考）



洋瓦葺き(左)と石州瓦葺き〔参考〕



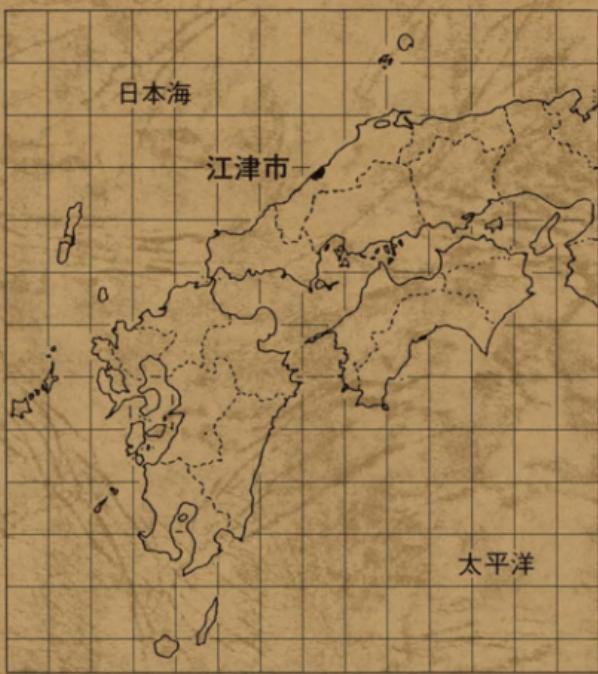
同上〔同上〕



軒瓦種々〔同上〕

江津都市計画道路體谷線建設予定地内
田室窯跡発掘調査報告書

発行 1991年3月25日
江津市教育委員会
〒695 江津市江津町1525番地
印刷 玉江印刷
〒695 江津市江津町1110番地



江津市の位置